

## 35 ハンガリー医学史瞥見

—ゼンメルワイズ医学史博物館訪問記

佐藤 裕

北九州市立若松病院外科

一九六二年ブダ王宮南側の麓に産褥熱の制圧を成し遂げた「ゼンメルワイズ (Ignaz Semmelweis: 1818-1865)」を讃えて、「ゼンメルワイズ医学史博物館 (Semmelweis Orvostörténeti Múzeum)」が開館した。

ゼンメルワイズの生家を利用して開館した二階建の博物館であり、第二次世界大戦中に全壊したがその後再建されて今日に至っている。受付に近い二階の一隅にはゼンメルワイズや彼の家族の肖像画が飾られた一家の居室や当時の薬局が復元され、さらに中規模の展示ホールには古代ローマ時代から近代に至る医学の歴史が展示されている。この展示ホールが一番奥が感染症とその制圧の歴史に関する展示コーナーで、リスターやジェンナー等とともにゼンメルワイズが成した不朽

の業績が解説展示されている。なかでも、当時のベスト大学医学部のゼンメルワイズを含めた教授陣の集団肖像銅版画などに混じって見学者の目を引くのが、ゼンメルワイズ自身の剖検記録（従来、指先の小さな傷から敗血症に陥り症候性精神異常をきたして死亡したとされている）と彼の頭蓋骨（レブリカ）の展示である。なお、ゼンメルワイズの死因に関してアメリカの医学研究家のヌーランドは、臨床記録（攻撃的言動の表出）や肖像画にみられる急激な容貌の衰えとウィーンでなされた脳の病理組織学検査の結果から、Alzheimer病ではなかったかと考証している。ブダペスト市内のケレペシ墓地 (Kerepesi temető) にゼンメルワイズの墓があるが、彼の遺灰を入れた骨壺はこの博物館の中庭の壁の中に納められている由。

一八五〇年ブダベストに戻ったゼンメルワイズは、市内の聖ルカ病院 (Szent Rókus Kórház) に産科医師として迎えられ、ここでも次亜塩素水による事前の手洗いの励行によって産褥熱の制圧を成し遂げた。その後一八五五年にはベスト大学医学部の産科教授に任命

されている。このときペスト大学においてゼンメルワイスを擁護支援したのが、その当時のハンガリー医学界の中心人物であった Janos Balassa (1814-1868) と Lajos Markusovszky (1815-1893) であった。

Janos Balassa はウィーン大学 (スコダに師事) やウィーン総合病院で学んだ開明的な外科医であり、一八四三年よりペスト大学医学部の外科学教授を務めており、一八五二年にはハンガリーにおいてはじめて全身麻酔下手術を敢行している。さらに、ハンガリー医学界の中心人物として大学医学部の改革 (近代化) や医学教育の改善に尽力したが、ゼンメルワイスのペスト大学への招聘もその一環であった。

Balassa の後継者 Lajos Markusovszky もウィーン大学 (Wartmann 教授に師事) で学んだ医師で、ウィーン時代からゼンメルワイスと親交していた。一八四七年に Balassa 教授の助手となり、ペスト大学において自分自身がエーテル麻酔を体験して以後、エーテル麻酔下に多くの外科手術を行った。また、ハンガリー独立戦争時には軍医団の長として出征し数多くの困難な

手術をこなした。大学復帰後も師 Balassa の後を嗣いで一八五七年に創刊された「Orvosi Hetilap (Medical Weekly : 医事週報)」の編集刊行を続けた。ゼンメルワイスに彼の成した重要な発見を論文として発表することを勧めたのがこの Markusovszky であり、一八六一年にはゼンメルワイスの唯一の論文である「Die Aetiologie, der Begriff und die Prophylaxis des Kindbettfebers」が刊行された。

現在ハンガリーにはブダペスト (Budapest)、ペーチエ (Pecs)、セゲト (Szeged)、デブレツェン (Debrecen) の四都市に六年制 (一学年約一〇〇人) の医科大学があり、このうちセゲトにある医科大学はハンガリーが輩出した一九三七年度のノーベル医学生理学賞者の Albert Szent-Gyorgyi を記念して「アルベルトセントジョルジ」医科大学と呼ばれ、首都ブダペストにあるペスト大学の医学部はゼンメルワイスの功績を讃えて、ペスト大学二百周年目にあたる一九六九年に「ゼンメルワイス医科大学」と改称されて、今日に至っている。